2017／夏

季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

■目次

越前和紙への提言　近藤陽子さん……2
取組紹介　ののすておりがみ……1
レポート　講演会「文化財の宝庫五箇、千五百年の軌跡と奇跡」……3
情報欄……4　頁

―越前和紙への提言―

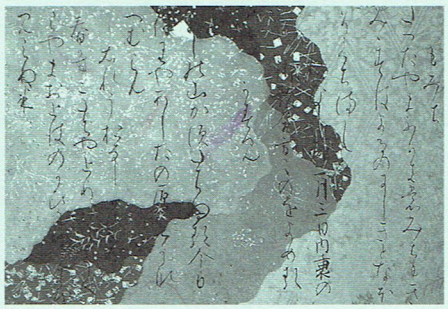
■近藤 陽子（こんどう ようこ）
1948年、東京生まれ。学習院大学文学部哲学科卒業ののち、講談社にて編集の仕事に携わる。79年、母、近藤富枝（文筆家、平成28年逝去）が「王朝継ぎ紙研究会」を設立すると同時に参加。以来、NHK文化センター、読売カルチャーセンターなど全国11カ所（生徒数約150名）の教室を運営。母富枝氏の後を継ぎ、現在同研究会主宰者。

■近藤陽子さん「王朝継ぎ紙研究会」主宰「料紙装飾の至宝『王朝継ぎ紙』を深め、広める」

●「王朝継ぎ紙」と「西本願寺三十六人家集」

「継ぎ紙」という言葉は「源氏物語」にも出てきますから、平安中期にはすでにあったと思われます。「王朝継ぎ紙®」という呼び名は、この研究会の創設者、母の富枝が命名しました。平安末期に作られたこの素晴らしい和紙工芸は、後の「源氏物語絵巻」や「平家納経」「久能寺経」など装飾料紙の走りとも言えるもので、当時の作品としては唯一「西本願寺本三十六人家集」（国宝）が残っているのみです。

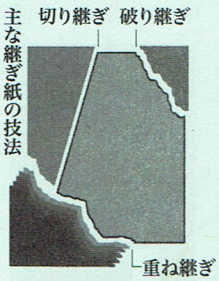
研究者達によれば、「西本願寺本三十六人家集」は、天永三年（一一一二）三月、妃の一人であった藤原道子（承香殿女御）が白河法皇の六十の賀の祝いに贈り物として献上したものといわれています。奈良・平安の有名歌人三十六人の歌を作者別に集め、両面加工の粘葉装に仕立ててあります。全体三十九帖（人麻呂集、貫之集、能宣集については上下二帖構成）の内、三十二帖が平安当初の作、他は鎌倉時代に「兼輔集」、江戸時代寛文期に「人麻呂集上・下」「業平集」「小町集」の四集が補われました。江戸期、西本願寺では法会仏事に展示された記録はあるものの、やがて忘れられてしまいました。明治二九年、歌人で古筆研究家の大口鯛二によって再発見され、その冊子群を見て深い衝撃を受けた田中親美という二七歳の青年画家が、十年近くの歳月をかけ、模本を作りました。昭和四年、西本願寺は宗教女子大学（現在の武蔵野大学）設立の資金源として「貫之集下」と「伊勢集」三百数十頁を売却、「石山切」として分割されました。平成十五年には、国宝「三十六人家集」の全巻と田中親美の模本、分断された石山切の展示が東京国立博物館で実現され、研究会メンバーは夢見心地で見に行きました。

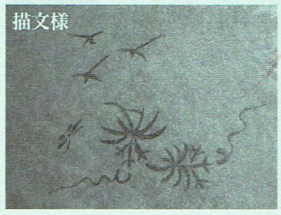


王朝継ぎ紙研究会 新井誠子作

●奥深い技法

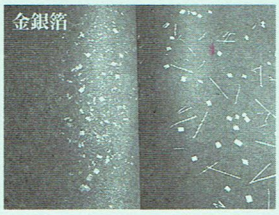
研究会の目的は、「三十六人家集」（以下「本願寺本」と呼ぶ）をお手本にしながら、王朝継ぎ紙の技法を研究、復元、次世代に伝え、展覧会を通して、類まれなるこの平安の料紙装飾の美しさを広く知っていただくことです。私達は紙を漉くこと以外は全てやります。紙を染め、唐紙を摺り、金銀箔をちりばめ、主な技法である切り継ぎ、破り継ぎ、重ね継ぎを施し、墨流しや筆で文様を描くなど、あらゆる料紙装飾技法を駆使します。実は、「本願寺本」の中でも、継ぎ紙の技法が使われているのは一割くらいで、全体の半分を占めるのは唐紙です。私達は「本願寺本」で使われている唐紙を全て復刻しようと、版木の模様起こしから始め、彫り師さんに彫っていただいて、現在やっと五十点に近づきました。材質は桜材、サイズは33×45㎝くらいですが、ふすま唐紙の模様とは緻密さが違います。使っているうちに版木の一部が欠けたりすると、同じものを再度製作する時もありますが、同じ柄でも、彫り師さんによって摺った時の印象がかなり変わります。和紙に胡粉を膠で溶いた具引きをし、版木の上にキラなどをのせ模様を摺ります。ある時、九州国立博物館で本物を見る機会があり、観察すると、「本願寺本」にはないと言われていた「型抜き」の技法を発見しました。具引きが乾かないうちに版木を当て、凸の部分で具引きを抜く方法で、柄の部分に素紙の色が見えます。私達は失敗がきっかけでできた技法と想像してい





描文様

唐紙



金銀箔

よく使用される牡丹唐草文（通称花唐草）と版木

ます。「本願寺本」を専門に研究している学者はとても少ないので、技法に至っては、日頃から作っている者でなくてはわからないことも多く、解明するのも大変手間のかかることです。

●使われる和紙

教室で制作に使用する紙はいろいろですが、唐紙を摺るにはやはり鳥の子紙が一番適しています。日頃私達が使っている鳥の子紙は薄くて、ドーサ引きしているので、パリパリとした風合いですが、本物の「本願寺本」の紙は厚いのに、しなやかに垂れるようにページをめくることができます。打紙の効果か、時代による経年変化でしなやかになるのか、紙質の科学分析なども行われていないので、よく分かりません。唐紙でも染め紙でもその作業にあった和紙を探して使用しますが、困った時は、小津和紙さんに相談に乗ってもらい、調達していただいています。

亡くなった母もよく申していましたが、平安の美はうつろいの中にあると…。春霞も夕暮れの空などの自然の変化を小さな和紙の世界に閉じ込め、精緻な宇宙を作るのです。だから生徒さんにも、迷った時は「本願寺本」の原点に戻り、うんとぼかし染めを使いなさいとアドヴァイスしています。

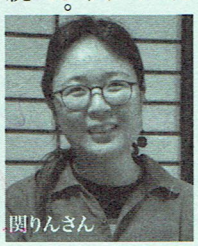
教室の様子

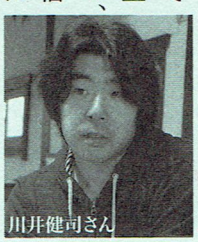
主朝継ぎ紙研究会 新井誠子作

取組紹介

■「ののすておりがみ」郷土の産業資源をヨシ紙に託して

琵琶湖の東部、滋賀県愛知郡愛荘町（えちぐんあいしょうちょう）は、高級麻織物「近江上布」の産地。室町時代、京都から麻織物の技術が伝えられ、江戸時代には彦根藩の強力なバックアップの元、近江商人によって全国に広がった。昭和五十二年には「伝統的工芸品」指定を受けている。その近江上布の型紙模様を折り紙にし、郷土の伝統産業の発信ツールなどに利用しているのが「ののすておりがみ」だ。町内の「カルチャーコミンカおうち」に、開発者の関りんさんと川井健司さんを訪ねた。


関りんさん


川井健司さん

●「ののすておりがみ」とは？

関さんと川井さんは二〇一四年、愛荘町が募集した「地域おこし協力隊」の第一期生だ。「地域おこし協力隊」は、地方自治体が地域外の人材を積極的に受け入れ、新鮮な発想で地域力の維持・強化を図っていこうというもの。総務省の事業として二〇〇九年制度化され、一～三年の委嘱期間中、隊員には報償費や活動費が国から助成される。

「私達は初めての隊員だったので、愛荘町の方も私達も最初は手探り状態でした。町の活性化を考えるために、いろんな人達と出会う中で、近江上布のことも知り、『野々捨商店型紙』というパターン集をご紹介いただきました。二〇一二年に愛荘町教育委員会と愛荘町文化協会が地域資源報告書としてまとめたもので、これを何か活用できないかと相談されたのが始まりです。」と関さん。

近江上布伝統の染めの技法は二種類あり、一つは櫛の背に似た弧形の木片を押し当てて色付けする櫛押し捺染、もう一つは絵柄が彫られた型紙を置き、上から色付けする型紙捺染がある。いずれも先に糸を染め、絵柄がずれないように織り上げることで、独特の美しい絣模様が生まれる。

「ののすておりがみ」は、この近江上布の機屋「野々捨商店」（明治十七年創業）で使われていた型紙の模様を受け継ぎ、折り紙用の紙にしたものだ。同店は惜しくも二〇〇二年に廃業してしまったが、この伝統文化を伝える型紙に親しみを持って気軽に触れられるよう、なにか形を変えられないだろうか？と考えた。

●シックな色合いと柄

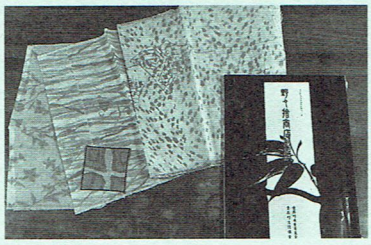
「ののすておりがみ」のネーミングは、ひらがな表記で覚えやすく、なつかしく優しい響きがする。

「たまたま、当時関さんが手伝いに行く旧中山道沿いの道の駅に、折り紙の上手な人がいて、そこで教えてもらったのが八角箱だった。ののすての柄を折り紙の箱に組んでみたらと試してみたのが、折り紙を作るきっかけでした。関さんは遊びが研究テーマだったし、僕はアーティストなので二人の柔軟な発想がいい形で組み合わさった」と川井さんは振り返る。

6月にオープンした拠点

模様集はデジタルアーカイブ化されていたので、役場の協力でスムーズにオフセット印刷することができた。野々捨商店は多色刷りが得意で、ものによっては一種類の布に二十版もの版を重ねて刷ったそうだ。全部重ねて刷ると複雑な模様になるが、その一部をバラして使うことで、ユニークでモダンな絵柄となった。約六千枚もあった型紙の中から吟味して選んだ柄は、乱れ四角形、小さな台形、ＵＦＯを連想させる宇宙文字のような模様、ギザギザ模様や蝶々など十二種類。サイズは15.6×15.6㎝と通常の折り紙よりやや大きめで、セット価格千円。色は柄の面白さを強調するために、シックな白黒にしたので、かえって目を惹く。

紙は、「リエデン・プロジェクト」など、琵琶湖の環境に寄与する商品開発やＣＳＲ社会活動を行っている地元企業、（株）コクヨ工業滋賀の協力を得て、同社のヨシ紙に印刷することがかなった。紙には、琵琶湖や淀川水系のヨシが三十％使われている。


野々捨商店の型紙パターン集

●経過と展開

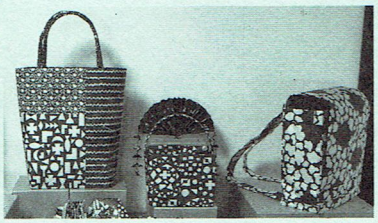
元々、地域に埋もれた魅力を発信したいという願いから作られた折り紙だが、メディアも取り上げたくれたお陰で、この折り紙が欲しいと

いう人が増えてきた。お二人は地域おこし協力隊の委嘱が終わる三年間が過ぎたのを機に、今年六月、展示、販売、ワークショップのできる拠点として「ののすておりがみ屋」をこの古民家にオープン。商品アイテムは、折り紙だけでなく、トートバッグ、イヤリングやブローチなどのアクセサリー、髪飾り、扇子、ブックカバー、風鈴など。地域の様々なイベントや関西圏のデパートでの折り紙ワークショップの他、カルチャーセンターでもバッグ作り等を教えている。紙は従来のサイズの他に、A3サイズと小さなサイズ(10×10㎝)を加え、バラ売りもできるようにした。折り紙教室も月に二回行なっている。

「折り紙は、幅広い世代が楽しめますし、折り紙の達人も協力してくれていますので、心強いです。多くの人が交流し、地域を知ってもらい、様々なアイデアが湧いてくる仕掛けとして、この折り紙が利用されれば嬉しい。」とお二人は語った。

12枚セットの「ののすておりがみ」

作られる様々なアイテム



レポート

■講演会「文化財の宝庫五箇、千五百年の軌跡と奇跡」-村田健一氏(福井県文化財調査特別顧問、東京藝術大学客員教授)

去る四月八日、かねてより工事中であった越前和紙の里「紙の文化博物館」がリニューアルオープンし、ゴールデンウィークも含めた一ヶ月間、同館では「民俗文化映像研究所」撮影の貴重なドキュメンタリー「越前和紙」上映会、公家と武家の礼法を伝える折形の講演会と体験、和紙のデザイン戦略を考えるトークセッション、和紙のテーブルコーディネート講座、越前和紙青年部会による創作和紙展示、など様々な記念催事が行われた。

四月十五日には、文化財を通して、当地が千五百年もの長きにわたって和紙の産地であり続けた秘密や背景にある文化を読み解こうという講演会が博物館別館にて行われた。講演者の村田健一氏は建築が専門、文化庁文化財部参事官(建造物担当)を長年務め、現在は故郷の福井県に戻り、地域の文化財研究と保存に尽力している。

村田健一氏

●紙を核とした多様で豊富な文化財

文化財保護法が定めている文化財の種類には、建物・彫刻・絵画などの有形文化財、伝統技術などの無形文化財、民俗芸能などの民俗文化財、史跡・名勝などの記念物、棚田などの文化的景観、伝統的な集落・町並の伝統的建造物群がある。

このうち越前和紙の一大産地として名高い五箇には、文化的景観、伝統的建築物群以外の文化財が揃っており、国指定文化財が四件。県指定文化財は九件。市指定に至っては二三三件にものぼる。時代も、古代から江戸期のものまで残っており、五つの集落で建物、文書、祭り、庭園など、これほど多くの文化財があるのは全国的に見ても珍しい。そしてその多くが「和紙」「紙漉き」「紙の神様」に関係するものである。近代に入っても、人々は伝統だけにあぐらをかくのではなく、常に目を外に向け、最新のものを和紙に生かそうとしていた。明治政府が力を入れたウィーン万博に出品された越前和紙の表彰状とメダルなども、最近三田村氏の蔵から発見されている。各時代に常に紙のトップを目指し、かつそれを達成してきた関係者の気概と努力が、千五百年もの間、紙漉きトップの座を続けてこられた所以であろう。その証左が文化財にも表れている。

●五箇の指定文化財

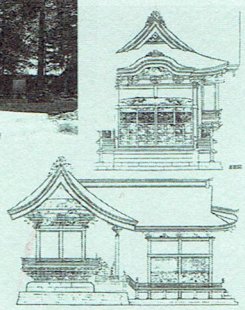
	種別	名称	時代	所在地	指定年
国指定	建造物	大滝神社本殿及び拝殿同附書	江戸(天保14)	大滝町	S59
	有形民俗文化財	越前和紙の製作用具及び製品		越前市	H26
	無形文化財	越前奉書		大滝町	H12
	名勝	三田村氏庭園	江戸中期	大滝町	H27
県指定	彫刻	木造　虚空蔵菩薩坐像	平安前期	大滝町	S63
	考古	松明山2号噴出土遺物	古墳前期	定友町	S63
	無形文化財	越前和紙・打雲・飛雲・水玉の製法		大滝町	S50
	無形文化財	工芸技術　墨流し		大滝町	H12
	無形文化財	越前鳥の子		新在家町	H28
	無形民族文化財	大瀧神社・岡太神社の春祭り		大滝町	H14
	天然記念物	大滝神社の大スギ		大滝町	S39
	天然記念物	大滝神社のゼンマイ桜		大滝町	S39
	天然記念物	大滝神社奥の院社殿		大滝町	S61

●紙祖神を祀る大瀧神社の価値

当地の文化財の中心は、何と言っても全国唯一、紙の神様を祀る大瀧神社である。神仏習合の重要文化財に指定されたのを記念して出版された「紙と神の郷」(平成四年刊)の中で、当時の文化財調査官斎藤英俊氏も、近世社寺建築の特色を以下のように六項目を挙げ、大瀧神社は、三・四を除いて、近世後期の建築物の典型例として四項目がピッタリ当てはまり、意匠、造作など質的にもトップクラスであると述べている。

一、複数の建物を組み合わせて複雑な平面、立面を作る
二、複雑な屋根の形を作る
三、規模が大きい
四、内外部に極彩色で絵画や紋様を描く
五、彫刻を多用する
六、斗栱(ときょう-深い軒を支える柱の上の組物)を装飾的に用いる

同神社は保存状態も極めて良く、建築年代が明確であり、大工などの職人の名前が明らかなこと、それらを証明する図面や見積書など


重文大瀧神社本殿及び拝殿と天保再建時計画図(府指定)

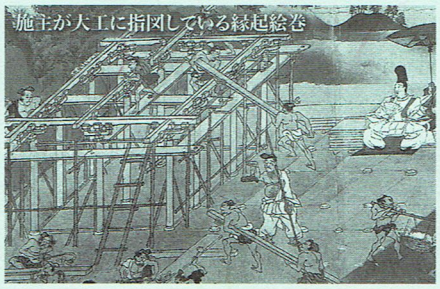
土地の神郷というより、製紙業の守護神「川上御前」崇拝に永年支えられてきた神社だ。昭和五十九年、当神社本殿及び拝殿が国の

の造営資料が残っていることが、この建物の文化財的価値を更に高めている。

本殿は天保十年(一八三九)から計画され、同十二年着工、同一四年に完成をみた。造営文書によると、工事は永平寺門前大工、大久保勘左衛門という名棟梁が九名の門前大工を引き連れてあたった。

●さらに背景を読み解く

天保五年に寄進された「祭礼図絵馬」に描かれた大瀧神社には拝殿はなく、本殿だけである。唐破風、千鳥破風、賑やかな彫刻や斗栱もない。永平寺の大工が拝殿建立を提案したとは考えづらく、施主である神社の考えが相当入っていると考えた方がよい。昔の施主は大変な見識があり、建築に対しても相当知識があった。桂離宮を造営した八条宮家二代の智忠親王などの博学と美意識は、そのよい例であろう。施主が大工を指図している場面があちこちの絵巻物に見られ、指図の駆け引きを伝える伝承も多い。


施主が大工に指図している縁起絵巻

神社側の考えで拝殿を付けたと仮定すると、その形式はどこからきたのだろう。この類の形式は越前にはないが、福井工業大学の多米淑人教授の最近の研究では、近世になると若狭、近江、丹波、山城には、本殿の前に拝殿を設け、一体化するようなものもあるということがわかってきた。兵庫県丹波市の重文、柏原八幡宮の社殿などは大瀧神社に酷似しており、参考にしたのかもしれない。本殿九面、拝殿二面の壁面を飾る彫刻も、中国の故事を題材とし、大瀧当主衆の教養を垣間見ることができる。

流造本殿に妻入りの入母屋造拝殿を連結し、さらに千鳥破風を付けた複雑な建物構成は他に類がなく、大瀧神社社殿の大きな特徴となっている。屋根は「こけら葺」文化圏の当地で、当神社は一番格の高い「檜皮葺」である。建物は総ケヤキ造りで、桁の上の垂木にもケヤキを用いていて珍しい。

大瀧神社に酷似する柏原八幡宮社殿

日本人は石加工が苦手で古代の一時期は真面目に石加工を行うものの、後になると逆に得意な木の方を石に合わせるようになる。近世に入ると、城郭建築の登場により、きれいに加工し整然と積み上げる技術が格段に進んだ。大瀧神社の石仕事はその到達点とも言えるもので、本殿の下は赤茶の石、その上には郷土の誇り、青い笏谷石を用い、意匠的にも用途的にも二種類の石をうまく使い分けている。

最後に、村田氏は「文化財はとかく建造物や彫刻というジャンル別縦割りで捉えられがちであるが、五箇の文化財を捉える場合、それぞれ別個に評価するのではなく、『紙』をキーワードに関係性を総体として認識し、再編成される必要がある。本講演がそのためのきっかけとなれば嬉しい」と締めくくった。

情報欄

●イベント情報

■第9回越前和紙七夕吹き流しコンテスト作品展
時:7月7日(金)～7月23日(日)
場所:越前市いまだて芸術館

■越前市小学校卒業証書漉き
時:7月19日(水)～8月25日(金)
場所:パピルス館(協力:越前和紙伝統工芸士会)

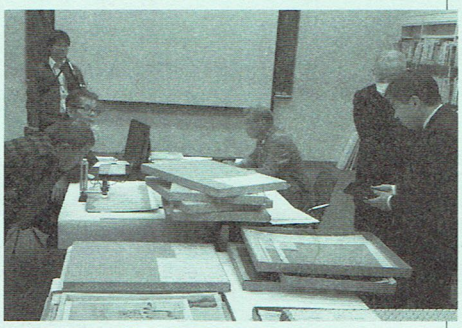
■河濯さんまつり
時:8月5日(土)
場所:和紙の里通り

■おもしろフェスタ2017
時:7月29日(土)～30日(日)
場所:サンドーム福井(越前市)体験

■越前モノづくりフェスタ2017
時:9月16日(土)～18日(月・祝)
場所:サンドーム福井　展示・体験

■全国手すき和紙連合会島根大会
時:10月11日(水)～12日(木)
場所:鳥取県出雲市　シンポジウム・大会

■RENEW(大日本市鯖江博覧会)
時:10月12日(木)～15日(日)
場所:鯖江　河和田地区　展示・即売


本年2月、和紙文化研究会の協力を得て、加飾された料紙を中心に重文の越前鳥の子紙の非破壊繊維分析とDMS撮影を行った。

速報

●「越前生漉鳥の子紙」異例の早さで国指定・重要無形文化財に

平成29年7月21日、文化庁文化財部は「越前鳥の子紙」をあらたに重要無形文化財に指定し、その保持団体として「越前生漉き鳥の子紙保存会」(会長:柳瀬晴夫)を認定した。室町時代にはすでに鳥の子紙が漉かれ、以降、常に我が国の鳥の子紙主要産地の一つとして現在に至る、当地の和紙文化と高度な製作技術が認められたもの。ユネスコ無形文化遺産登録を目指し、2015年3月に発足した同保存会は、この2年間多様な角度から精力的に活動。2015年1月の福井県無形文化財指定に続き、異例の早さでの国指定となり、21日にはプレス発表が行われた。

編集後記
新井誠子さんの「愉しい王朝継ぎ紙とくみひも展」(於小津和紙)の作品にはつい目が惹き込まれた。小さきものをいとおしみ、流転する時を静かに味わうような装飾の宇宙に「ものの哀れ」を感じた。(よ)

季刊・和紙だより 第55号(2017年夏号)　発行日:2017年7月25日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人:福井県和紙工業協同組合　石川浩　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所:Office YOMOSA　〒520-0025　滋賀県大津市皇子が丘1-6-6 #209　Tel/Fax: 077-523-4172　E-mail: myomosa@mx5.canvas.ne.jp
編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子　印刷所:有限会社新進堂印刷所(京都府宇治市)　用紙:機械漉き大礼紙(石川製紙株式会社製)
※無断での転写・転載はお断りします。